

# 卒業35年目九州霧島山の遊山

小杉 忠利

平成10年11月2日(月)午前8時私は今、鹿児島県えびの高原の「韓国岳」登山口を少し登った所に居る。ふと下の県道を見下ろすと、停車していたバスが2台出発しようとしている。そこから、尾根つたいの山道を目で追うと、長い行列の人影。これは大変と、休憩を切り上げて、そそくさと出発。ホテルの食事が7時から始まるのでどうしても出発はこの時刻になる。2ヶ月ぶりの山行なので、足も重く、おまけに本日の歩き始めで、急ぐと呼吸が速くなる。40才代の夫婦を追い越し、追い越されをして、しばし休憩。下の方からは、元気のよい話し声が、風に乗って追いかけてくる。私も、この夫婦の方も同じく、賑やかな団体に追いつかれないと、少々急ぎ登りを試みている。しかし、奥さんのほうは、少し辛そう。

道は整備されていて、丸太杭を両側に打ち込み、それに横丸太を渡して土を止め、階段状の登山道となっている。その両側は、滑り易い赤土の道が、幅を広めたり、狭めたりして続いている。山道だから、階段の踏み台の長さも、まちまちで、ステップも自分のそれではなく、階段に合わせて登らなければならない。長い山道を歩く時は、一定の歩幅で、自分の呼吸に合わせた早さで歩くのが、疲れにくいコツだ。階段は滑ったり、大きくつまずいたりはないが、足全体を高く持ちあげないとステップを越えられないので、積み重ねると大きな体力の消耗につながる。脇の赤土道を、勾配に合わせた最小の足上げで、自分の歩幅で、靴底全体を土面にフラットにしっかりと載せ、くるぶしを充分使って歩くと疲れは少なくなる。でも、山道はそんな場所は少ない。わずかに数メートル先の道を目で追いながら、歩き易い疲れのないルートを選んで登るが、体力のある若い時とは、また違う山行なのだろう。五合目に展望台があり、パンパンに膨らんだ小型のザックを降ろして一息つく。

実は、昨日、一昨日と、大学卒業35周年を記念して、土木科で学んだ連中が宮崎に集合し、定年あるいはリストラの波にもまれる中、昔日の話を酒の肴に、飛ばなくなったドライバーにひやかしのかけ声を入れながら、あっという間の2日間を過ごしたばかり。集まった30人弱のメンバーは、又の再会を期して慌ただしく夫々の方向に出発して行き、私は、せつ

かくの機会なので、南国の易しい山を単独行と決めこみ、昨日は宮崎からバスでえびの高原行きにゆられ、最後は乗客が私一人となり、真暗になった終点で下車する。ホテルへの300mほどの道のりを、半月の月明かりに道案内されながら田舎道を下る。すすきの生い茂る雑草の中を、黒っぽい動物が1頭通過。イノシシと思ったがどうやら小型の鹿らしい。この夜はホテルに一泊し、翌早朝、今日、明日の為、安全を考えて多めの山行荷物をパッキングして出立してきた。洗面道具、雨具、防寒着、着替え、カメラ機材、弁当、ETCとぎゅうぎゅうに詰め込んだ為、重さも20kgほどになる。

この荷を下ろして、はるかなる景色を楽しんでいるうち、例の登山ツアーが追いついてきた。60才以上の人が多く女性が半数以上。10人、20人、30人・・・60人以上の大集団だ。北海道の大雪山でも聞いた、関西なまりのしゃべり。聞いてみると大阪からとの事。先頭を歩いている、元気なガイドのおじさんが、景色の説明を始める。追いつかれない内にと、荷を背負って、私は出発する。8合目辺りで休憩中に、とうとう追いつかれてしまった。これだけの集団が、落後者もなく揃って登って来るパワーはたいしたもの。



黄色い種も、たわわの宮崎県の象徴フェニックス

ここから眼下に、伝説の湖「大浪池」が、空の青さ映して四季折々に変わる景観とお浪伝説の臼状火山の火口湖として有名だ。大阪弁の説明による話を書き綴ればこんな風になる。「大浪池は、周囲 1.9km、水深は約 12 m、標高は 1240 m の高地にあり、標高では日本一の湖であります。この湖のほとりに、昔々村の庄屋が住んでいましたとさ。裕福な暮らしをしておりましたが、唯一つ子宝に恵まれないのが、夫婦の悩みでありました。そこで、必死になってお山に願かけをし、満願の日に、妻は見事、身ごもることが出来ました。やがて、玉のような美しい女の子が生まれ、お浪と名付けられました。両親の愛情あふれる養育のもとで、女神の生まれ変わりかと思われるほど、美しく気品あふれる娘に成長しました。18才の春には、降るような縁談がありました。両親の問いかけに、お浪は唯さびしくほほえむばかりで、首を縦に振りませんでした。



うっそうとした樹木の茂る大浪池

両親はどうしてなのか判らず、お浪も、唯泣くばかりで、とうとう病気になってしまい、あの美しさも見る影もなくやつれてしまいました。霧島の森に月が輝く満月の夜、お浪は湖へ行きたいと、両親に何時になく強情にねだりとうとう3人で行くことになりました。森へ分け入り、湖のほとりに来た時、お浪の瞳はキラキラと輝き、父の手を振りほどくとあっとい間に湖に入ってしまいました。両親は、気も狂わんばかりに「お浪！お浪！」と呼び続けると、水面から大きな竜が首をもたげ、悲しげに夫婦を見つめ、水中深く消えてしまいました。お浪は、この湖に住む竜王の化身だったのです。それからこの池を“お浪の池”と呼ぶようになったのだそうです。」説明と休憩が終わると、また60数名の行列が始まった。最後まで待っていると時間がかかる

ので、適当に列に割込み、賑やかな話声中の登山に加わる事にする。

韓国岳の頂上近くは、次第に平坦になり、道も幾筋に分かれているので、列からはずれて歩き始める。私のすぐ後ろを歩いていた女性が、「そっちの道は違いますよ」と呼んでいるので、「私は別者ですが」と答えてやり過ごす。

臼状火口のお鉢の一番高い所が、標高 1700 m の頂上になっており、噴火口を覗き込むと、高さ百数十mの、火山岩のもろい断崖絶壁になっている。ここ霧島地域には、20を越える火山があり、その内、水深 5 m 以上の、火口湖として 10 が現存している。硫黄山、新燃岳、御鉢は、現在も活動しており、最も新しい噴火は、昭和 34 年の新燃岳の噴火である。

今日の目的地は、その新燃岳を通過し、霧島神宮が曾てあったという、高千穂河原までの、約 6 時間ほどの行程だ。登りルートとは反対の東南のガレ斜面を、大阪弁の喧騒から逃れて 9 時 30 分に下りはじめる。やがて道は、雨にうがたれた黒土の、溝状に続く窪地沿いになり、雨の日に登山する人は、ドロドロ道で難渋するだろうなと思いながら下る。平坦な所では、細い山道の両側に、花の散ったミヤマキリシマの、細くこまかく分岐した枝が小さな葉をつけて、びっしり、垣根のように育っている。歩くと体の両側に、固いタワシを当てたように擦っていく。

獅子戸岳(1421m)付近では、土建屋さんが道普請をしていた。例の丸太杭で階段状の登山道を作っている。聞いてみると、韓国岳までやるとの事で、まだまだ大変な仕事量だ。来る途中に、松丸太が随所に置かれてあったから、材料はヘリコプターで運搬されているのだろう。完成まで 2 ~ 3 ヶ月はかかるとしても、工事人は毎日 6 km 以上の登山通勤をすることになる。働いている人も、若い人が多く「ご苦労さん」と声かけると、きちんと「ご苦労さんです」と答が帰ってきた。たくさんの高齢者に登山してもらおう為にも、こういった整備は必要なのかもしれない。北海道は、自然をありのままという考えと、地域が広い事もあるせいか、登山道のこんな整備は立ち遅れている。

11 時。新燃岳のお鉢の頂上に着く。すり鉢状の底には、きれいなエメラルド色の水が薄く、濃くと、2 段階に分かれて、浅く湛えられていた。すり鉢の壁からは、4 箇所数条の煙が上がっている。新燃



岳から中岳へ向けての下りは、また見事に整備された、板敷きの登山道というよりは遊歩道だ。南向きの緩やかな斜面のせいか、小さな“すすき”が斜面一帯に、びっしりと根付き、風に揺れている様は、行く秋の一つの景色として美しい。静かだった山行も終わり、ここいらへんからまた人の行き交う声が多くなり始める。最後の登りを終えて中岳(1345m)に到着。なだらかな山頂で、すすきに履われた浅い火口がある草原という感じ。途端に女子高校生のレンガ色のジャージ姿とキャーキャー笑う声が、開けた景色の中に飛び込んでくる。



霧島山周辺概要図

三三五五のグループに分かれて、弁当を使っていたり、ゲームをしたり、寝ころんでいたり、その数2~3百人ほどが、草原いっぱいに展開している。とっつきよい女生徒は、「こんにちは」と声をかけてくる。ここを下れば、今日の目的地高千穂河原だが、かなり急な崖下り。頂上のすぐ下に、女生徒3人が食事をしていたので「5分も登ると、仲間の所に行けるよ。行かないの」と声をかけると、「いいんです。ここで昼食べてから、戻るんです。」と返事が返ってきた。頂上に登ることだけが遠足の目的でもないし、まあいいかと先生のような事を考えながら下っていくと、同じように数グループがあちこちに散会していた。殆ど下の方で、今まで見かけなかった男子生徒5名のグループに遭遇した。「あれっ、男の生徒もいたんだ。」と声に出しかけてやめた。ジャージに書いてある学校名をみると、「都城商業高校」とある。それで、女子が多いことが読めた。

午後1時30分高千穂河原到着。背負ってきた弁当を取り出し、手打ちうどんをおにぎりの友として、遅い昼食をとる。今日は平日だが、連休の中日のせいか、駐車場には大型バスがびっしりと並んでいる。明日はここから、更にその曾ての時に、霧島神宮があったというお山、高千穂峰を往復する予定だ。タクシーを呼んでもらい、本日の宿泊地、霧島神宮温泉に向かう。運転手の話では、この観光シーズンは、花の春と紅葉の秋なのだが、不景気のせいかさっぱり駄目ですわと、ぼやいていた。宿のチェックインは3時からとのことだったが、早めに入れてもらい、バスルームでまず汗を流しさっぱりとする。今日の縦走で少し疲れているが、遷宮3回目の霧島神宮を参拝に行くことにする。行きはタクシー、帰りは散策しながら戻る事にする。



参拝客で賑わう霧島神社

現在の地に社殿と別当院が建立されたのは500年ほど前のことである。当初は高千穂峰に建立されていたが、火山爆発により焼失し、西暦940年頃、高千穂河原に移された。約290年間はここに神宮はあったが、霧島山の噴火の為、1234年再度焼失した。3回目遷宮の現在の社殿も、火事や度重なる噴火と出火で、古文書類の殆どを紛失してしまった。現存しているのは、江戸時代前期のご社殿と九面（鬼面）くらいとのことだが、広い境内に展開している、朱塗りのご社殿はなかなか立派なものである。本日は参拝客も多く賑っている。私は、賽銭箱へ奉納し、家内の母の健康祈願をする。帰り道の参拝通路の両側には、数百年の杉が立ち並び、森林浴で英気をもらいながら散策する。

坂本竜馬も、妻おりょうと共に、この霧島神宮を訪れており、今で言う新婚旅行中だったらしい。私が明日行く、高千穂峰も登っており、「乙女」姉さん

に書いたと思われる手紙には、その頂上にある「天の逆鋒」がぐらぐら動くので、二人して引っ張ったら抜けてしまい、またもとに戻しておいたと、自筆の登山ルート図面の中に注釈入りで書いてある。やんちゃ気が多い、維新の獅子、龍馬の面目躍如という所でしょうか。

境内の前には、食事所やおみやげ品店が軒を並べているが、境内の賑いとは裏腹に、人影はあまり見当たらない。参拝者はバスツアーで来て、ご社殿近くの駐車場で乗り降りするので、遠回りしてこま

では来てくれない。よく見ると、店を閉めていたり、廃屋に近い家も見かけられるので、ここにも過疎の影が忍び寄ってきているのだろう。

ここ霧島温泉郷は、至る所で温泉が湧出するので、多くの温泉宿舎が建ち並んでいる。交通の便の悪い、ひなびた温泉ほど、うまく経営していかないと、いつの間にか忘れ去られてしまっている。

霧島神宮を離れ、県道沿いの歩道を旅館まで散策。観光客の車が、バスがひっきりなしに通過していく。交差点では、乗用車に、神宮へ行く方向を訪ねられ、「ここを右折して2Kmほど行くと、右側にあります。」と道案内。本当の所は、「私は北海道から来ているんだよ」と言いたくなった。道路の両側には、数キロにわたって「ミヤマキリシマ」の、高さ2mほどの垣根が出来ている。道路の線形通りに曲線を描いた、緑の回廊と言う感じだ。春になると、これがピンク色の回廊に変わるわけだ。美し過ぎて、渋滞や事故がおきるのはという心配は・・・余計だな。道路からちょっとそれて、林の中に入ると、



高千穂峰を図示し、所感を記した龍馬の手紙



ガジュマルに似た蔦が垂れ下がっており、足下も落葉が少なく、照葉樹林のせい、昼だと言うのに薄暗い。南国の自然と幹線道路が、背中合わせで配置されている。

宿の近くで、もう一つの過疎に出会ってしまった。総面積253万㎡の、温泉付き林間住宅分譲地。道路の両側は斜面や崖地だというのに、土地を購入した人の名前を書いた看板が字も色あせて、続々と立っている。ポツンポツンと建っている家で、きちんと管理されているのは数えるほど。草は、ぼうぼうと茂り、鉄骨は錆び、クモの巣はかかり中には窓が割れてしまっている家も。昭和50年頃から売り出した、温泉付き別荘地だ。「将来に備えて土地を買っておいて、老後は温泉につかりながら、気楽な人生を」のプランを、多くの人達に夢見させた結果が、名札だけの土地になってしまっている。

11月3日(水) お陰様で今日も天気は快晴。8時15分高千穂河原出発。冷んやりとして気持ちの良い、整備された石畳の山道を歩いていると、薄暗い林の中を突然「どどど」と音を立てて鹿が逃げていく。毛が黒っぽいので薄暗い林の中では見えにくく、突然飛び出してきたような感じで目に飛び込んでくる。鹿も、人影を見て驚いて走り回っているようだ。人里にいるとはいえ、やはり、野生は人とは相容れない。

やがて、御鉢火口への赤いガラガラ石の急登になり、ジグザグに自分のルートを捜しながら「フーフー」息つきをしながら登る。今日は往復なので、リュックの中は水とカメラだけでとても楽だ。ハイキングコースの感じで、大勢の人が登山をしているようだ。急坂になってからは、火山岩が多く、例の階段工は難しいので、上の方は道普請は殆どしていない。ここの御鉢も活火山で、数箇所煙をたなびかせている。壁の傾斜が緩いので、お鉢の底に下りて、石文字を書いた元気者がいたようだ。



中岳より手前のお鉢、高千穂峰を望む

お鉢の頂上から緩やかに続く高千穂峰への鞍部には、平坦な箇所があり、社伝によれば、西暦540年頃に建った神宮はこのあたりではないかと想像する。頂上までの標高差180mの急ガレに、数珠つなぎになって登山者が取付いている。靴の紐を締め直し、少し間をおいて登山開始。ジグザグコースで、小さな石を踏んで滑らないよう、目で足場を確認しながら、一步一步登る。途中で休んでいる人を追い越し、ノンストップで頂上へ。「お～着いたぞ」

写真で見た例の逆鉾が、石積の台の中心に据えられている。360度さえぎるものもなく、すべて見渡せる。南に目をやると、残念ながら、春のようなカスミに邪魔されて、桜島や屋久島までは見えなかった。お賽銭を投げ、2拍2礼で、家内安全、商売繁盛の挨拶をすませる。登山者名簿があったので、記名しながら、この1年分をめぐってみたが、北は東京まではいたが、北海道なんて、まして留萌なんて誰もいなかった！

30分の頂上滞在で、11時に下山する。下りは、体力よりも、昔取った杵束で、多少暴走族気味に降り方開始。登りに苦労したザラメ石は、靴をその中に埋没させて、石を雪崩落しながら、クッション替わりにして下る。固い岩の箇所は、山靴のつま先を着地させながら、くるぶしと膝のクッションを利用して衝撃を和らげ、目で次の足場を判断して、もう一方の足を着地させる。これで、普通の人々の2倍から3倍は、早く下ってしまう。高千穂河原に着いて、2番目に遷宮された、古宮址を訪ねる。

登山の汗を流す為、白鳥温泉で骨休めをする。ここは、西郷隆盛が官途をやめ故郷に帰った時遊んだという、地元の人も推薦する、ひなびた温泉だ。近所の農家の年寄りが、今年の作柄の話をするのを聞きながら、午後の陽が照りつける、熱い露天風呂の中で私の35年目の記念の旅を終えることにしました。大学の土木科を卒業して、某建設会社に就職したのが、同じ昭和39年。卒業、そして就職35年目が今年にあたり、土木科の同窓会が宮崎でありました。仲間も、転職した者、これから職探しをする者、夫婦で出席した中には、健康を損ね奥さんの介添いで出席した者、社長で頑張っている者、参加したくても夫々の事情で来れなかった者と、色々でした。2日間は、旧交を温めるおしゃべり、冷やかし、そして思い出作りで、あっという間に終わってしまいました。

当時を思い起こすと、就職した時は、給料が2万円ほどで、現場で寮生活だったので、給料の殆どを

飲み代に使っていた。支給日になると、某キャバレーの主任が、お菓子持参で、取立に来ていたものでした。昼休みの麻雀や花札、夜は酒談議が、現場の活力源でした。そんな時代に、土木屋として鍛えられた、兵の集まりでした。

まだまだ健康で頑張らなければならないという、気持ちと気合いを込めて、「霧島山」遊山物語として纏めてみました。

小杉忠利